

みんなづくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

共感共創学としての風土学の再構築：
環境と心性を架橋する人と自然の科学知に向けたグ
ローバル人文学の創成へ＜基幹研究：
グローバル地中海地域研究＞

メタデータ	言語: ja 出版者: National Museum of Ethnology 公開日: 2023-04-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西尾, 哲夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00010013

共感共創学としての風土学の再構築

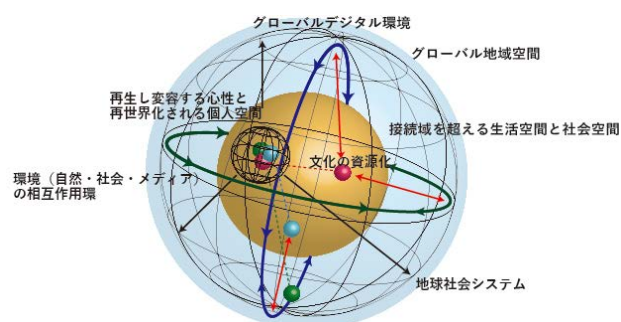
—環境と心性を架橋する人と自然の科学知に向けたグローバル人文学の創成へ—

西尾 哲夫

問題意識

世が乱れるとファンタジーが流行する。フランス革命、関東大震災しかり、現在の『鬼滅の刃』もそうだろう。ガラン記『千一夜』は1704-1717年に出版されたが、有名なアラジンは原典になくシリアのマロン派キリスト教徒が語ったとされる。日本では1707年に富士山の大噴火が起こった。翌年シリアでは飢饉と社会不安が続き、フランス権益代表のマロン派はルイ14世に庇護を求め、件の人物がパリに赴いた。フランスでも大寒波で多くの死者がでた。たとえこれらが同時代の一連の出来事だとしても、ガランがその人物に偶然出会い、ファンタジーとしてのアラジンが書かれ、それが児童文学の誕生を促し、やがて近代的倫理観を彫塑していく様相を、マクロな環境変動がミクロな人びとの心性に関係する物語として描き出すことは難しい。

ひるがえって現代におけるグローバル化とデジタル化の急加速は、グローバルデジタル環境の出現、個人と地球社会の間の空間域の流動化、既存の価値（在来知や文明的価値）の資源化、社会のさまざまなアクターの地球社会の構成員化を生じさせている。筆者のこれまでの研究の関心は、人間がいかに自然環境を認識し、その相互作用の中でいかに個人と個人、個人と共同体の関係が紡がれていき、いかなるメカニズムで継承・変容していくかを明らかにすることであった。人間の普遍的能力に環境（自然・社会・メディア）が変項として関与するという目論見で人間の内面性の問題と向き合うと同時に、地域研究の方法論を模索する中で、地域性をミクロな人間の内面性やマクロなグローバル地域との連関で捉える視点をもつようになり、地球社会における環境と心性の連環という、人と自然の相互作用環の根源的かつ包括的理解に係



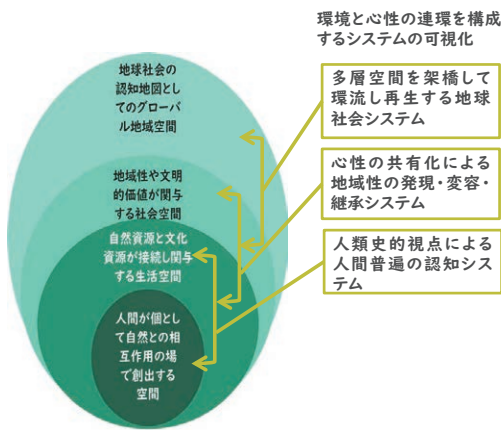
地球社会における環境と心性の連環モデル (筆者作成)

る未開拓の問題に対峙するに至った。

このような問題を考察するために前提となる共通認識として、①環境と人口をめぐる地球規模の変動は私たちの社会や経済が自然や生態と深く関係していること、②グローバル化とデジタル化の急加速は地球を狭くさせ、そこには限りのあること、③地球社会の持続可能性と個人の幸福の追求は深く関係すること、④いまや地球環境の危機とは私たちの心のあり様「心性」の危機となったことがある。そこからの問題意識として、①私たちの考え方や感じ方はどこまで自然環境の影響を受けているのだろうか、②その影響は他人との付き合い方・社会の作り方・世界のあり方の点でどこまでどのように及ぶのか、③自然環境が異なれば必ず異なるのならばなぜどのように異なるのか、④だとすれば地球環境変動はどのような影響を与え、いかにたがいの問題として理解しあえばいいのか、がある。異なる心性の人びとがどうやって違いをこえて地球社会の共創のために協働できるのかという問いに答えるためには、地域性をミクロな人間の内面性やマクロなグローバル地域との連関で捉える視点が必要となるが、既成の関連分野には方法論的視座がなく、地球社会における環境と心性の連環という未開拓の文理共創的な視座から考える必要がある。人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「現代中東地域研究」では、自然資源と文化資源を接続した挑戦的方法論が国際的評価を受けた。新たな「グローバル地域研究」プログラムの「グローバル地中海地域研究」プロジェクトでは、ブローデルの研究を継承して環境と心性に係る地域性の解明をめざす。

方法論を求めて

フォーラムとして展示する側・展示される側・展示を観る側が参画する構想で国立民族学博物館の西アジア展示新構築を実施し、「フォーラム型情報ミュージアム」の実践プロジェクトでは研究者コミュニティ、研究対象の現地社会、研究成果の受け手の一般社会の三者が相互に交流・協働するフォーラム的アプローチの可能性と問題点について考えてきた。これからの人文学の果たす役割とは、グローバル化と環境変動が進む地球社会のあり方を共に考える空間としての学術と社会のフォーラムを構築し、私たちが個人としてどのように地球社会を共創していくのかについての未来予想図を統合的視点で描き出すことだろう。筆者は「人間・社会・自然の全体



新たな個人と世界の関係へのアプローチを担保する理論的モデル（筆者作成）

理解に向けて」と題して「2020年には、地球社会における個人と共同体のつながりを根底から揺るがず現象が進行し、個人の実践が、地域社会や国家システムを超越して地球社会へと直截に影響を与え、地球社会と個人が対峙した」として、人びとの皮膚感覚である「地球社会」の実相を捉えるグローバル地域研究の必要性を説いた（西尾・東長 2021: 355-365）。そのために「個人」の周囲に「社会」「地域」「世界」を設定し、「個人」を包摂する価値体系としての「文化」「文明」「世界システム」を解明してきた従来の分析モデルに代わる、環境と心性の連環モデルを構築することで、時間的にも空間的にも分野間でも複雑に連関している現代の地球環境に係る問題を解決する実践的研究が求められている。

環境と心性の連環を捉えるためには、人間が個として自然との相互作用の場で創出する空間、自然資源と文化資源が接続し関与する生活空間、その外縁にある地域性や文明的価値が関与する社会空間、さらにその外縁にある地球社会の認知地図としてのグローバル地域空間の中で、自然環境／社会環境／メディア環境、さらに接続域を超えて人間存在を無辜に暴露するグローバルデジタル環境が生む相互作用環の様相を究明する必要がある。そのためには、まず人類史的視点による人間普遍の認知システム、心性の共有化による地域性の発現・変容・継承システム、多層空間を架橋して環流し再生する地球社会システムの中で、社会・経済系と自然・生態系の相互関係や連環を、環境と心性の関係性に係る問題系として整理しなおす。そのうえで、従来の文化・文明・世界システムの思考にはない視点で地球環境に係る問題を把握し、情報科学や認知科学、哲学とも協働し、AIやロボット工学への応用を見据える新しい人間・環境学の視座を踏まえることで、人新世において「人はどう生きるべきか」という問いに答えることができる。

研究のひとつのフェイズとして

本プロジェクトではまず、地中海を取り囲む諸国を、北は「ヨーロッパ」、南は「中東・北アフリカ」として分断する既存の地域研究の枠組みを脱構築し、「地中海地域」としての歴史的・文化的な関係性を包括的に捉える。次に、地中海は内

西尾 哲夫（にしお てつお）

国立民族学博物館グローバル現象研究部教授。専門は言語学、アラブ研究。アラブ遊牧民の言語人類学的研究やアラビアンナイトの比較文学的研究に従事。著書に『ガラン版千一夜物語』（全6巻 岩波書店 2019～2020年）、『ヴェニスの商人の異人論—人肉—ポンドと他者認識の民族学』（みすず書房 2013年）などがある。

海であるものの、西に航海すれば大西洋の先にアメリカ大陸、南東のスエズ運河を經由して紅海から東アフリカやインド洋と繋がっている。また、シルクロードをたどると中央アジアに到着する。そこで、大航海時代から現代までの地中海を介したグローバルな人・モノ・知識の往来について、文学、歴史学及び文化人類学を主要なアプローチとし、超地域的かつ学際的アプローチを援用して考察することで、新しい地域研究の構築を目指す（詳細は、<https://www.r.minpaku.ac.jp/gmed/index.html>）。

その先へ

水俣病という近代日本最大の環境問題に対峙した石牟礼道子は、複雑な現代で個人が社会を変えるために発信できる最大の武器が文学であると言った。文学と科学、一方は個性を極大化しもう一方は極小化し、一方は言葉を極限まで私化しもう一方は極限まで客化するが、個人の内面から立ち上がり地球社会をも内包しなければならないと彼女は言っているのである。人間存在自体に環境が内在化しているとするれば、それに無自覚な人文学との協働は相補的にならざるをえず、近代科学の根底にある西洋の人文知を、人と自然の共感共創の大きな物語として描きなおすグローバル人文学に基づく科学知の創成が求められている。

引用文献

西尾哲夫・東長靖編 2021『中東・イスラム世界への30の扉』pp. 355-365. 京都：ミネルヴァ書房。



マルタの港にて（2007年2月、マルタ共和国・バレッタ、筆者撮影）